

「そこに、山が」

—2 稿—

2026/8/18

〈人物表〉

穂波 由紀^{ほなみ ゆき}

(65・35)

夫・毅を亡くしたばかり

穂波 嵩^{ほなみ たかし}

(40・10)

由紀の息子。穂波家の一人息子

穂波 毅^{ほなみ たけし}

(40)

亡き由紀の夫

1. 穂波家・リビング（朝）

リビングの一角には、仏壇。線香が二本。

登山ウェアの穂波由紀（65）、手を合わせている。

仏壇には白木の位牌と写真立て。

山道で笑う夫・毅の写真。

嵩の声「母さん、準備できた？」

振り向くと、同じく登山ウェアの息子・嵩（40）。

由紀 「うん」

と、仏壇に置かれた登山用の熊鈴を手に取る。

リュックにつけ、

由紀 「行こっか」

2. バス車内（朝）

「苔石山登山口行き」のバス。登山客ばかり。
こけいしやま

車窓から、雲ひとつない青空の下に広がる田園風景
と、その奥に苔石山が見える。

座席に座る二人。

由紀 「まさか三十年ぶりに登るとはね」

嵩 「俺も。三人で登ったきりだよ」

由紀 「それでよく誘ったこと」

嵩 「母さん元気なさそうだったし、ショック療法ってこと」

由紀 「ありがと。もう大丈夫だから」

由紀の熊鈴、バスに揺られカラカラ静かに鳴る。

3. 苔石山登山口（朝）

苔石山の麓。登山客がちらほら。

二人、舗装された坂道を登る。

坂の上には、すぐ近くにロープウェイの駅。

山頂方向からロープウェイが降りてきている。

嵩 「一本早い乗っちゃおうか」

と、ロープウェイ券売機の列に並ぶ。

由紀、立ち止まって、

由紀 「……あのさ」

嵩 「？」

由紀 「乗らないで登ってみない？」
嵩、驚いて、

嵩 「……マジで言ってる？」

由紀 「だって、お父さんの代わりに来たわけでしょ？」

嵩 「うん」

由紀 「お父さんならさ、乗らないかなって」

嵩 「まあ、そうだろうけど」

由紀 「ごめん、急か」

嵩、やれやれと列を外れる。

嵩 「どうせこれも、七合目までしか行かないからな」

4. 登山道（朝）

舗装された急勾配な坂道。

由紀、トレーニングポール片手に登る。

嵩 「本当に大丈夫ー！？」

少し後ろで嵩、心配そうに由紀を見上げる。

由紀 「大丈夫！」

5. 登山道（朝）

木の板の階段道。

由紀、一段ずつ肩で息をしながら登る。

6. 登山道・祠の前（朝）

登山道にある小さな祠。

二人、説明の立札を読んでは、賽銭を投げ入れて手を合わせる。

7. 登山道・五合目あたり（昼）

木々に覆われた薄暗い斜面。

由紀、木漏れ日の中を懸命に進む。

由紀 「……もう五合目超えた？」

嵩、スマホのアプリを見て、

嵩 「……まだ」

由紀、苦笑いで肩を落とす。
と、少し開けた場所に出る。

由紀 「うわ」

木々の間から、麓の風景が覗いている。

嵩 「あれ、駅」

と、麓のロープウェイ駅を指す。

豆粒のように小さい。

由紀 「結構、来たね」

由紀、駅を見下ろし、目を丸くする。

と、麓の駅からロープウェイがやってくる。

あっという間に二人の頭上を過ぎていく。

二人、顔を見合わせ、苦笑い。

由紀 「父さん、よく毎年登ってたよね」

嵩 「何がモチベーションだったわけ？」

由紀 「あれでしょ。あれ」

嵩 「何？」

由紀 「そこに山があるからのな」

嵩 「まあ、そういうタイプか」

由紀 「今も、目の前にあるんだけどね。山」

嵩 「あるにはあるけどね」

由紀、ペットボトルを取り出し、水分補給。

嵩、塩飴を取り出し、由紀に差し出す。

嵩 「どうする？ まだ引き返すの間に合うけど」

由紀 「……なんのこれしき」

由紀、ペットボトルを飲み干し、進む。

嵩、苦笑いで着いていく。

8.

登山道・七合目前（昼）

山肌が剥き出しの斜面。

木の根や岩を選んでは、一歩ずつ一歩ずつ慎重に足を掛けて進んでいく。

斜面を転がり落ちる小石や土砂。

二人、額にはびっしょり汗。

由紀、右足を置いた岩がグラつき、体勢を崩す。

嵩 「母さん、大丈夫!？」

由紀 「あ、バランスを取ろうと咄嗟に右足を付くも、
「ありや」

足首を大きく内側に捻ってしまふ。

嵩、息を呑む。

由紀、苦しい顔でその場にしゃがみ込む。

9.

登山道・七合目前（昼）

由紀、ベンチ代わりの切り株に腰を下ろす。

由紀 「……いててて」

靴下を脱ぐと、右足首に青い腫れ。

嵩 「やっちゃったね」

由紀 「いやー、申し訳ない。自業自得だ」

嵩 「大丈夫大丈夫」

嵩、手際よくテーピングを巻いていく。

嵩 「歩ける？」

由紀 「……ゆっくりなら？」

嵩、どうしたものかという顔。

ふと、上を見上げ、

嵩 「あそこか」

視線の先には、ロープウェイの駅。

嵩 「ちょっと、貸して」

と、由紀のリュックを預かり、体の前にかける。

嵩 「これなら行けそう？」

由紀 「あ、うん」

由紀、ゆっくり静かに立ち上がり、足踏み。

嵩 「よかった」

嵩、リュックの熊鈴に気づいて、

嵩 「母さん、これダメだよ」

と、吹き出す。

由紀 「え？」

嵩 「これ、ロック掛かってるから」

と、ロックを外して熊鈴を振る。

嵩 「ほら」

熊鈴、カランカランと鳴る。

由紀、あっと何か気づく。

10. ロープウェイの駅（昼）

「苔石山七合目駅」の立札。

11. ロープウェイ車内（昼）

車窓からは山の景色が一望。

由紀、その風景をスマホで撮影。

嵩の声「ロープウェイだって悪くないでしょ？」

二人、並んで座っている。

由紀「悪かったってば」

嵩「冗談だから」

と、苦笑い。

由紀「でも、頂上はもっとすごいのかな」

嵩「流石に覚えてない？」

由紀「……あん時もさ、上まで登ってないんだよ」

嵩「え？」

12.

（回想）登山道・七合目前（昼）

先ほどの七合目前の登山道を登る、三十年前の夫・

毅（40）と由紀（35）。

後ろで嵩（10）、今にも泣き出しそうな顔。

嵩「……疲れた」

子供の嵩、大泣き。

嵩「歩けない！ もう帰りたい！」

と、駄々をこねる。

由紀、困って毅を見る。

毅、すぐさま嵩のリュックを預かって、

毅「ロープウェイまで頑張れる？」

と、嵩の肩を掴んで、毅然と話す。

由紀、呆気にとられる。

嵩、驚いて泣き止んでは、頷く。

毅、嵩の熊鈴に気づいて、ロックを外す。

懸命に歩く嵩の熊鈴、カランカランと鳴っている。
毅 「ほらもうちょっとだぞー」
と、嵩に声をかける。

13. ロープウェイ車内（昼）

由紀 「後から聞いたたら、登山中に歩けなくなった奴が出たら、荷物持ったり、励ましたりしなければいけないって、そう決まってるんだとさ」

嵩 「なんじゃそりゃ」
と、吹き出す。

由紀 「ほんとだよ。厳しいんだか優しいんだかと、苦笑い。」

嵩 「父さんの代わりは、また来年か」

由紀 「だね」
二人、窓の景色を見下ろす。

14. 穂波家・リビング（朝）

仏壇。線香が一本。
写真立ての、山道で笑う毅の写真。
その横には、ロープウェイで撮った嵩と由紀の写真と、熊鈴。

由紀、カランカランと熊鈴を鳴らし、手を合わせる。
少し、笑みが溢れる。

（おわり）